

令和4年度病害虫発生予報第3号

令和4年6月1日
山梨県病害虫防除所

今月の天気予報

5月26日気象庁発表、1か月予報による関東甲信地方の向こう1ヶ月（予報期間5月28日～6月27日）の天気は次のとおりです。

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1ヶ月の気温は平年並か高いでしょう。前線や湿った空気の影響を受けやすいため、向こう1ヶ月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ない見込みです。

I 特に注意が必要な病害虫

【果樹】 ※予想される主な病害虫の発生時期及び発生量等は以下のとおりです。

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
ブドウ	晩腐病	—	平年並～やや多い	<ul style="list-style-type: none"> ○昨年、発生量がやや多く、結果母枝等での越冬病原菌は多いとみられる。 ○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □病原菌は、雨水により飛散するため、落花期以降、降雨が続く場合は注意が必要である。 □雨水による感染を防ぐため、第1回ジベレリン処理後、直ちにロウ引きのカサかけを行う。 □仕上げのカサかけ、袋かけは早期に行う。 □防除暦に従い薬剤防除を徹底するとともに、ブドウ晩腐病防除マニュアル（令和3年12月発行）を参考に防除対策を行う。
	べと病	—	平年並～やや多い	<ul style="list-style-type: none"> ○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並～やや多い。 ○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □薬剤の散布間隔をあげないよう予防散布を徹底する。曇雨天と低温が重なる気象状況では、発病が多くなる恐れがある。 □ほ場の立地条件や、夜温などの気象条件、また、品種によっても発病が多くなる可能性があるため注意する。 □発病した葉や果穂は伝染源になるため、見つけ次第除去する。天候不順が続く場合や発病初期は「オロンディスウルトラSC」または「ジャストフィットフロアブル」の追加防除を行う。 □「Ⅲ 各種病害虫対策」の項も参考とする。

【野菜】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
半促成トマト	黄化葉巻病	—	平年並	<p>○5月下旬現在、一部の巡回ほ場でわずかに発生が見られる。</p> <p>□媒介虫であるコナジラミ類の防除を徹底する。（コナジラミ類の欄参照）</p> <p>□発病株は見つけ次第抜き取り、ビニール袋に入れて、コナジラミ類を死滅させ、枯らしてから施設外に持ち出し、土中に埋めるなど適切に処理する。</p> <p>□「Ⅲ 各病害虫対策」及び令和3年度病害虫防除所情報第4号「施設栽培トマトの黄化葉巻病対策について（半促成栽培）」（令和4年3月発行）も参考にする。</p> <p>https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/documents/220322_jyuhoudai4gou.pdf</p>
	コナジラミ類	—	平年並	<p>○5月下旬現在、黄色粘着トラップ（中央市）における成虫誘殺数は平年並である。</p> <p>○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□トマトのウイルス病を媒介するコナジラミ類の侵入を防ぐため、施設開口部（天窗、側窓、換気扇口等）は0.4mm目以下の防虫ネットを設置する。また出入り口のカーテンは二重にするなどして、侵入を防止するとともに、ネットの隙間がないか、経年劣化して穴が空いていないかなど施設の点検を励行する。</p> <p>□黄色粘着板を設置し、コナジラミ類の誘殺状況を確認し、発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。</p> <p>□施設内外の雑草は、コナジラミ類の増殖源となるため、除草を徹底する。また、芽かき、葉かきした茎葉は適切に処理する。</p> <p>□ウイルス病の発病株は見つけ次第抜き取り、ビニール袋に入れてコナジラミ類を死滅させ、枯らしてから施設外に持ち出し、土中に埋める。</p> <p>□トマトのマルハナバチ導入施設では、薬剤の使用が制限され発生が助長されるため注意する。</p> <p>□「Ⅲ 各種病害虫対策」の項も参考とする。</p>

Ⅱ 各作物の病害虫発生予報

【果樹】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
ブドウ	うどんこ病	—	平年並	<p>○近年、発生量は平年並で推移している。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□葉や果穂に発病するので、小豆大期の防除を徹底する。</p> <p>□葉や果穂への発病が、突発的に見られるので注意する。特に湿度が高い日が続く場合に多発する恐れがある。</p> <p>□風通しの悪い園や河川の近くのほ場でも発生が多いので注意する。</p> <p>□特に発病しやすい欧州系品種では、果穂の発病状況に注意する。</p>

【果樹】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
ブドウ	灰色かび病	—	平年並	<p>○近年、発生量は平年並で推移している。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□開花期に曇雨天が続き、花かすが落ちにくいと発生が多くなるため、花かす落としを徹底する。</p> <p>□発病した果穂は取り除く。</p> <p>□落花直後の薬剤防除を徹底する。</p>
	クビアカスカシバ	平年並	平年並	<p>○5月下旬現在、フェロモントラップ（南アルプス市、甲州市）への誘殺数は平年並である。</p> <p>□虫糞やヤニを目安に、被害の早期発見に努め、粗皮下に食入した幼虫を捕殺する。</p> <p>□カサかけ・袋かけ後に、サムコルフロアブル10 5,000倍を主幹部や主枝など太枝によくかかるように散布する。ただし、周囲にデラウェアや立木類（かきを除く）がない場合は、パダンSG水溶剤1,500倍を用いてもよい。</p>
	チャノキロアザミウマ	平年並	平年並	<p>○5月下旬現在、黄色粘着トラップ（南アルプス市）への誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□例年6月中旬頃から発生が多くなるので、薬剤防除を徹底する。</p> <p>□袋かけを行う園では、薬剤散布後できるだけ早く袋かけを行う。カサで管理する園では新梢や副枝先端への寄生が多いので、薬剤がかかりやすくなるよう新梢管理を徹底し、カサかけ後は棚上散布を行う。</p>
モモ	せん孔細菌病	—	平年並	<p>○5月下旬時点で、一部地域では発病葉を確認しているが、発病葉率は少ない。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□春型枝病斑（スプリングキャンカー）が見られる枝や発病した葉および幼果は速やかに除去し、できるだけ早く袋かけを行う。また、袋かけ終了までは、薬剤防除を徹底する。</p> <p>□モモせん孔細菌病防除マニュアル（令和3年12月発行）を参考に防除対策を徹底する。</p>
	黒星病	—	平年並	<p>○近年、防除が徹底されており、発生量は平年並で推移している。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□降雨が多いと発生が多くなるため、防除暦に従い防除を徹底するとともに、早期に袋かけを行う。</p>
スモモ	スモモヒメシンクイ	—	平年並	<p>○5月下旬現在、フェロモントラップ（南アルプス市）への誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□幼虫の食入を防止するため、薬剤散布を徹底する。</p> <p>□被害果は発生源となるため、見つけ次第取り除き、放置せず土中に深く埋める。</p> <p>□被害の多い園や晩生種では、交信かく乱剤（ナシヒメコン）を利用する。</p>

スモモヒメシンクイ、クビアカスカシバのフェロモントラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/92111468716.html>

【果樹】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
モモ・スモモ・オウトウ	灰星病	平年並	平年並	<ul style="list-style-type: none"> ○近年、防除が徹底されており、発生量は平年並で推移している。 ○開花期の花腐れの発生量は少なかった。 ○向こう1カ月の降水量は平年並か多い見込みである。 □収穫直前の降雨が続くと多発することがあるので、予防散布を徹底する。 □被害果は、見つけ次第土中に埋める。
カキ	落葉病類	—	平年並 ～ やや多い	<ul style="list-style-type: none"> ○昨年秋の巡回調査で発生園が多く見られ、園内の越冬病原菌は多いとみられる。 ○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □感染期間が5～7月と長期間にわたるため、防除暦に従い落花後から定期的な予防散布を行う。
果樹全般	果樹カメムシ類	—	平年並 ～ やや多い	<ul style="list-style-type: none"> ○5月下旬現在、フェロモントラップ（南アルプス市、甲州市）への越冬成虫の誘殺数は、一部の地域でやや多い。 □山野部に、野生する餌（実）量によって、果樹園への飛来状況が異なる。 □飛来状況は、地域やほ場によって差があるので、夕方～夜間及び早朝に園を確認し、飛来状況に応じて地域ごとに一斉防除を行う。

カメムシのフェロモントラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/kajyukame.html>

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
夏秋ナス	オオタバコガ	平年並	平年並	<ul style="list-style-type: none"> ○5月下旬現在、フェロモントラップ（甲府市、笛吹市）への誘殺数は平年並である。 ○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □老齢幼虫には薬剤の効果が低いため、発生初期の防除を徹底する。 □幼虫は果実内部に食入し、農薬がかかりにくくなるため、作業の際にはほ場内をよく観察し、食害痕や虫糞を目安に幼虫の早期発見に努める。
	ハダニ類	並 (例年比)	並 ～ やや多い (例年比)	<ul style="list-style-type: none"> ○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並であるが、一部地域ではやや多い。 ○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。 □薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。 □葉の裏に多く寄生するため、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。

オオタバコガのフェロモントラップの調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
夏秋ナス	アザミウマ類	並 (例年比)	並 (例年比)	○5月下旬現在、現地ほ場における発生量は例年並である。 ○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □発生初期の防除を徹底する。 □ほ場周辺の雑草は発生源となるので除草を徹底する。
	ハスモンヨトウ	平年並	平年並	○5月下旬現在フェロモントラップ（甲府市、笛吹市）への誘殺数は平年並である。 ○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □老齢幼虫には薬剤の効果が高いため、発生初期の防除に重点を置く。
スイートコーン	オオタバコガ	—	平年並	○5月下旬現在、フェロモントラップ（甲府市、鳴沢村）への誘殺数は平年並である。 ○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □雄穂抽出期、絹糸抽出期に薬剤防除を行う。 □老齢幼虫には薬剤の効果が高いため、発生初期の防除を徹底する。
	アワノメイガ	—	平年並 ～ やや多い	○5月下旬現在、フェロモントラップ（甲府市）への誘殺数はやや多い。 ○5月下旬現在、巡回ほ場での発生量は平年並である。 ○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □雄穂抽出期、絹糸抽出期に薬剤防除を行う。 □被害雄穂は早期に切除する。
	ハダニ類	—	並 (前年比)	○5月下旬現在、巡回ほ場（甲府市）における発生量は前年並に多く、気温の上昇とともに発生量は増えてきている。 ○近年、ハダニ類の発生が多く見られている。 ○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、早期発見に努め発生初期の防除を徹底する。
	アブラムシ類	—	並 (前年比)	○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は前年並である。 ○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □早期発見に努め、発生初期の防除を徹底する。

ハスモンヨトウ、オオタバコガ、アワノメイガのフェロモントラップの調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
半促成トマト	葉かび病	—	平年並	<p>○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1ヶ月の降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□多発生すると防除が困難なため、早期発見に努め、初期防除を徹底する。</p> <p>□発病した葉は伝染源となるため、除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□抵抗性品種でも発病する菌が存在するため、注意して症状の有無を確認する。</p>
	すすかび病	—	並 (例年比)	<p>○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。</p> <p>○向こう1カ月の降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□多発生すると防除が困難なため、早期発見に努め、初期防除を徹底する。</p> <p>□発病した葉は伝染源となるため、除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□葉かび病と似ているため、防除には両方に登録のある薬剤を利用する。</p>
	灰色かび病	—	平年並	<p>○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気等による施設内の湿度低下に努める。</p> <p>□早期発見に努め、発病した葉・花弁・果実は除去して施設外に持ち出し処分する。</p> <p>□前年多発した施設では発生に注意し予防散布に努める。</p>
半促成キュウリ	べと病	—	平年並	<p>○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、適湿となるよう換気を行う。</p> <p>□多発すると防除が難しくなるため、発生初期の防除を徹底し、発病した葉は除去して施設外に持ち出し処分する。</p>
	うどんこ病	—	平年並	<p>○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□早期発見に努め、発病した葉・果実は除去して施設外に出し、処分する。</p> <p>□多発すると防除が難しくなるため、予防防除に重点を置く。</p> <p>□同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。</p>

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
半促成キュウリ	褐斑病	—	平年並	<p>○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□施設内が高温多湿にならないように過度な灌水は控え、適湿となるよう換気を行う。</p> <p>□予防散布を徹底し、発病した葉は早期に除去して施設外に出し処分する。</p> <p>□カンタスドライフロアブル、ベルコートフロアブルは一部に耐性菌が確認され、今後の耐性発達が懸念されるため、連用を避ける。</p>
	アブラムシ類	—	並 (前年比)	<p>○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高い見込みである。</p> <p>□早期発見に努め、発生初期の防除を徹底する。</p>
	ハダニ類	—	並 (例年比)	<p>○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高い見込みである。</p> <p>□発生が多くなると防除が困難になるため、早期発見に努め発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。</p> <p>□葉の裏に多く寄生するため、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。</p>

【野菜全般】

病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
うどんこ病	—	平年並	<p>○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□早期発見に努め、発病した葉、花、果実は除去して施設外に出し、処分する。</p> <p>□発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。</p>
ハダニ類	—	平年並 ～ やや多い	<p>○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並からやや多い。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か高い見込みである。</p> <p>□発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。</p>
ハスモンヨトウ	平年並	平年並	<p>○5月下旬現在、フェロモントラップ（甲府市、笛吹市）への誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。</p> <p>□老齢幼虫は薬剤の効果が劣るので若齢幼虫の防除を徹底する。</p>

ハスモンヨトウのフェロモントラップの調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

【野菜全般】

病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
アサミウマ類	—	平年並	○5月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □発生初期の防除を徹底する。 □ほ場周辺の雑草は発生源となるので除草を徹底する。
オオタバコガ	—	平年並	○5月下旬現在、フェロモントラップ（甲府市、笛吹市）への誘殺数は平年並である。 ○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □老齢幼虫には薬剤の効果が低いため、発生初期の防除を徹底する。 □幼虫は果実や茎の内部に食入し、農薬がかかりにくくなるため、作業の際にはほ場内をよく観察し、食害痕や虫糞を目安に幼虫の早期発見に努める。
アブラムシ類	—	平年並	○5月下旬現在、現地ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1カ月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多い見込みである。 □発生初期の防除を徹底する。

オオタバコガのフェロモントラップの調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

【稲】

病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
いもち病 (苗)	—	平年並	○5月下旬現在、県下各地の発生量は平年並である。 ○向こう1カ月の降水量は平年並か多い見込みである。 □早期発見、早期防除に努める。 □育苗日数が長引かないように注意する。 □発病苗は見つけ次第、処分する。
いもち病 (葉)	平年並	平年並	○5月下旬現在、県下各地の発生量は平年並である。 ○向こう1カ月の降水量は平年並か多い見込みである。 □補植用の置き苗は伝染源になることが多いため、不要になった置き苗は速やかに処分する。 □追肥にケイ酸質肥料を施用する。 □日照不足田、冷水かんがい田及び常発地帯では予防散布を行う。 □アメダスデータを用いた葉いもち発生予測モデル「BLASTAM」感染好適日出現から7～10日後にいもち病が発生開始するため、状況に応じて防除を行う。
イネミズゾウムシ	—	平年並	○5月下旬現在、県下各地の発生量は平年並である。 □6月上旬までに田植えをする場合は育苗箱施薬を必ず行う。 □育苗箱施薬をしなかったほ場で、成虫が2株当たり1頭以上認められた場合、早期に薬剤防除を行う。
イネドロオイムシ	平年並	平年並	○5月下旬現在、県下各地の発生量は平年並である。 □中高冷地帯及び山付き地帯などの常発地帯では、発生状況に注意する。

水稲葉いもち発生予測モデル「BLASTAM」判定結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/blastam.html>

【樹木類】

病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
アメリカシロヒトリ	—	平年並	<p>○5月下旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は平年並である。</p> <p>□5月下旬から6月上旬が1回目の若齢幼虫の発生時期と予測される。この時期の防除が最も重要であるので、丁寧に薬剤散布するか、幼虫が分散する前に巣網を取り除き捕殺する。</p> <p>□公園、街路樹等における防除にあたっては捕殺を優先し、やむをえず薬剤散布を行う場合は、飛散防止対策を徹底する。</p> <p>□令和2年度病害虫防除所情報 第4号を参考にする。</p> <p>https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/69805589938.html</p>

アメリカシロヒトリのフェロモントラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/ameshiro.html>

III 各病害虫対策

【ブドウべと病の防除対策】

- (1) 新梢管理（芽かき、誘引、摘心等）により、棚面の明るさや風通しを確保し、葉・果穂に薬液が充分付着するようにする。
- (2) 曇雨天が続く年は、開花前から葉や花穂で発病し、その後多発する傾向があるため、管理作業と合わせ発病の有無を確認する。また発病した葉や果穂は、伝染源となるため、見つけ次第取り除き、ほ場から持ち出し処分する。
- (3) 防除暦を参考に、散布間隔を10日以内とし予防散布に努める。
- (4) 薬液散布量を遵守する。
- (5) 散布予定日に降雨が予想される場合は、散布を延期せず、降雨前に散布する。
- (6) 散布後に降雨が続いたり、集中豪雨があった場合は、防除効果や残効期間が短くなるため、散布間隔を短くする。
- (7) べと病防除剤の注意事項
 - ・天候不順が予想される場合や発病初期には、オロンディスウルトラ SC2,000倍またはジャストフィットフロアブル 5,000倍をかけむらのないよう丁寧に散布する。周辺に立木類がある場合は飛散しないよう注意する。耐性菌の発生を防ぐため、連用を避け、年1回の使用とする。
 - ・べと病防除剤は立木類に作物登録がないものが多いため、飛散しないよう充分注意する。
 - ・オーソサイド水和剤 80（使用回数は計3回まで）は、キウイフルーツの隣接園では飛散しないよう充分注意する。また、スモモに薬害が発生する恐れがあるため、隣接園では飛散に注意する。

【ブドウ黒とう病の防除対策】

- (1) 仕上げのカサ・袋かけを早期に行う。
- (2) 発病した葉や果穂は、伝染源となるため、見つけ次第取り除き、ほ場から持ち出し処分する。
- (3) 特にシャインマスカット等は本病に弱いので、防除暦に従い定期的な予防散布に努める。

【施設ブドウのハダニ類対策】

- (1) 例年、気温が高くなる時期以降から発生がみられる。発生は、スポット的に始まるので、発生初期を見逃さず防除を徹底する。
- (2) 防除暦を参考に、殺ダニ剤の散布を行う。発生が拡大してからの防除では発生を抑えることが困難であり、果実品質にも影響が出るので注意する。

【リンゴコカクモンハマキ対策】

- (1) 幼虫は葉を糸でつづって食害するため、巻き葉等の発生に注意する。
- (2) 5月下旬から6月上旬が第1世代幼虫の発生時期にあたり、果実等への被害も出てくるため、この時期の防除を徹底する。

【オウトウの褐色せん孔病防除対策】

- (1) 感染期となる収穫直後から定期的に防除を行う。
- (2) 例年発生が多い園では、8月以降も追加防除を行う。

【オウトウのオウトウショウジョウバエ防除対策】

- (1) 中・晩生種で被害が増加するため、果実の適期収穫に努める。特に加温ハウスや取り残した果実が多い園の隣接園では、発生が早いので注意する。
- (2) 初期からの予防防除を徹底するとともに、収穫が長引く場合は追加防除を行う。
- (3) 被害果は土中に埋める等、適切に処分する。

【野菜 夏秋作付前の対策】

夏秋ナス青枯病、夏秋ナス半身萎ちょう病、夏秋トマト青枯病、夏秋トマト半身萎ちょう病、夏秋キュウリつる割病、土壌線虫等

- (1) 苗は抵抗性台木を用いる。また、ほ場は過湿を避けるため高畝にして排水対策を心がけるとともに、連作をさける。
- (2) 土壌中に残存している病原菌や害虫を死滅させるため、本畑の土壌消毒を行う。

【野菜 施設栽培収穫後の対策】

トマト萎凋病、キュウリつる割病、イチゴ萎黄病、土壌線虫等

- (1) トマト、キュウリ、イチゴ等施設栽培作物収穫後の根、株、茎、葉等は翌作の土壌伝染性病害の発生原因になるので、早めに抜き取り施設から持ち出し、適切に処分する。
- (2) 前年発生の見られた施設では作付けを避け、輪作を行う。
- (3) 土壌中に残存している病原菌や土壌線虫等を死滅させるため、土壌還元消毒や太陽熱消毒を行う。

【トマト黄化葉巻病、トマト黄化病の原因ウイルスを媒介する

コナジラミ類の防除対策について】

- (1) トマト黄化葉巻病、トマト黄化病はコナジラミ類がウイルスを媒介して引き起こされる。タバココナジラミは両者を、オンシツコナジラミは後者のウイルスを媒介する。
- (2) 半促成栽培終了後、残渣は完全に枯らして、付着したコナジラミ類を死滅させてから片付けを行う。
- (3) 施設を10日以上密閉し、高温による蒸し込みを行い、コナジラミ類を死滅させ、次作に持ち込まないように徹底する。

詳細については「トマト黄化葉巻病（半促成栽培版）」の防除対策
<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/documents/20200106oukahamakiboujosisinn.pdf>を参考にする。

【サツマイモ基腐病の対策】

近年、九州地域のサツマイモ産地において発生が確認され、被害地域の拡大が見られている。発病すると地際部から茎が枯れ、いもが腐敗する症状を引き起こすことにより、大幅な減収を生じる。本県での発生は確認されていないが、被害の蔓延を防ぐため、以下の点に注意する。

- (1) 未発生ほ場で生産されたことの確認などにより、健全な種苗を確保する。
- (2) 植え付け前の種苗消毒を行う。
- (3) 栽培期間中は、ほ場観察を通じて本病の早期発見に努め、発病株はほ場外に持ち出して適切に処分する。

本病の防除に関する詳細な技術対策については、農研機構のHPに掲載されている、以下のマニュアルを参照とする。

「サツマイモ基腐病の発生生態と防除対策（令和3年度版）」

https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/stem_blight_and_storage_tuber_rot_of_sweetpotator03.pdf

【稲】

苗立枯病対策

苗立枯病は、主にリゾープス菌やピシウム菌、フザリウム菌、トリコデルマ菌などの糸状菌によって引き起こされる。以下の点に注意し、育苗期の防除を徹底する。

- (1) 育苗ハウス、床土及び育苗箱の消毒を徹底する。
- (2) 緑化期以降は昼間 25℃以上、夜間 10℃以下にならないよう、保湿資材の開閉はこまめに行う。
- (3) リゾープス菌による立枯病を防ぐため、べた積みは避ける。高温や多湿、過灌水は発病を助長するため注意する。

IV その他

【水田において使用する農薬の止水期間の遵守について】

- (1) 農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項を確認し、止水期間を7日間とする。また、止水期間の農薬の流出を防止するために必要な水管理や畦畔整備に努める。
- (2) 水稻初期剤の使用時期は、移植または播種の7日前までであり、農薬の河川等への流出を防止するため、移植6日前以降には使用しないこと。

【農薬危害防止運動について】

6月から9月は「農薬危害防止運動」実施期間です。農薬を使用するときは次の事項に注意してください。

- (1) 毒物または劇物に該当する農薬だけでなく、すべての農薬について、安全な場所に施錠して保管するなど、保管管理には十分注意すること。
- (2) 農薬の調製または散布を行うときは、ゴム手袋、マスク等の防護装備を着用し、慎重に取り扱うこと。
- (3) 農薬を散布するときは、事前に関係者に連絡し、隣接住宅等に被害を及ぼさないよう風向き等に充分注意すること。

(参考) 住宅地等における農薬使用について

農林水産省ホームページ http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_tekisei/jutakuti/

- (4) 水田において農薬を使用するときは、止水に関する注意事項を遵守し、河川の汚染の防止等、環境の保全に努めること。

- (5) 使用残りの調製液や散布器具を洗浄した水の、河川や水路等への直接排水は極力避けること。
- (6) 農薬やその希釈液、残渣等を飲食品の空容器等へ移替えしないこと。
- (7) 農薬の空容器、空袋等の処理は、廃棄物処理業者に処理を委託する等、適切に行うこと。
 - ・農薬使用者自身で、許可を受けた廃棄物処理業者に処理を委託する。
 - ・JA等、地域共同で適正に回収処分する体制が確立しているところでは、当該システムにより処分する。

連 絡 先

山梨県病虫害防除所（山梨県総合農業技術センター調査部）

TEL 0551-28-2941

Eメール byogaichu@pref.yamanashi.lg.jp

インターネット

山梨県病虫害防除所ホームページ

予報対象作物を中心に「トラップ調査結果」「病虫害写真」等を掲載しています。

アドレス <https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/>